

左が行く

介護施設探訪

明日から実践したい
気づきと学びが
ここにある。

第2回

高齢者110番の家地域食堂「きたほっと」

自分たちの地域と

命を守るため、

草の根運動を続ける

一般社団法人日本介護協会の左理事長
が行く全国の介護事業所訪問。第2回
は北海道の北東部にある人口約12万
人の北見市。(有)エーデルワイスの代表
取締役で「高齢者110番の家」の青山
由美子副会長と、その仲間たちとの座談
会は熱気に包まれました。(文中敬称略)

高齢者の介護に 悩む人を癒したい

網走から南西に約40^{キロ}。北見市新
生町は2012年に高齢化率が26%
に達した、4人に1人が高齢者の町
だ。老人が老人を介護する「老・老介
護」や認知症の人が認知症の人を介
護する「認・認介護」。どこに相談すれ
ばよいのかと思ひ悩む人も少なくな
い。在宅介護を続けることで、介護す
る者、される者の双方が心身ともに疲
弊し、家族関係が悪化するケースも
ある。高齢者110番の家は、そんな
新生町で、悩み苦しむ人々の心を少し
でも癒せるようにとの思いで、グルー
プホームや居宅介護支援事業所を運
営する(有)エーデルワイスの代表取締
役・青山由美子氏が中心となって、12
年3月10日に発足したボランティア

団体だ。介護業界関係者が10社程度
参加している。

主な取り組みは、趣旨に賛同した一
般家庭や企業が、介護に関する「駆け
込み寺」であることを示すシールを
貼って、高齢者や家族の悩みを受け入
れる活動だ。

シールが貼られた家では、介護を必
要とする高齢者や家族、認知症の方
が駆け込んだ時に次の対応を取って
いる。①認知症の方の住所が分かる場
合には家族へ連絡②自宅も不明で自
宅へ戻ることが困難な場合には警察
へ連絡③福祉の相談場所が不明な時
には、担当する地域包括支援センタ
ーへ連絡④体調も異常なく、身寄りも
なく福祉の相談の場合、地域包括支
援センター等へ連絡。

現在は北見市内の400軒ほどの

家や事業所に「高齢者110番の家」

のシールが貼られている。地域食堂
「きたほっと」は、その活動拠点であ
り、月に2回のオープン時には食堂と
してカレーやコーヒーを250円以
下の安価で提供するだけではなく、相
談を受け付けている。

人のためになる良いことをする上
でも精神論ばかりでは成立しない。同
じ志のある方の力を借り、高齢者11
0番の家が発足した。拠点となる地域
食堂「きたほっと」のオープンは月に
2回。制限することで、地域住民の中
で「きたほっと」の優先順位が上がり、
多くの人が集まるという。狙いは「向
こう三軒両隣」の関係を作ること。そ
の狙い通り、「きたほっと」には絵手紙
を描きに来る人や、音楽や踊りの発
表の場になるなど、賑わいがある。「絶



思い立ったらすぐ行動が信念の青山氏

しやすい環境作りを支援させていた
だいています。

左 シールが貼られている家では具
体的にどのような対応をされるので
すか。

青山 相談に訪れた方にはまずは安
心させる言葉を届けます。認知症の
方や、何らかの原因で自宅へ戻ること
ができない場合は、ゆっくりと目を合
わせ、急がずに名前や住所、誰と暮ら
しているかなどを優しく傾聴します。
どうしても住所などが分からない時
には早急に警察へ連絡を入れるよう
にしています。ゆったりと安心して
いただけるように、お水や温かいお茶な
どを飲んでいただくようにしていま
す。もちろん、対応後はむやみに他人
に話すようなことはしません。

左 認知症の方の対応は容易ではあ
りません。

青山 認知症には確たる定義がない
と思います。100人の認知症の方が
いたら、100人がそれぞれ別の症状
です。帰れない人もいれば、帰れる人
もいます。私たちの取り組みが浸透す
ることで、地域の人が「高齢者110
番の家」というのがあるんだ」と分かっ
ていただけたら嬉しいですね。

左 高齢者110番の家の拠点とな
る地域食堂「きたほっと」は地域住民
にとってどのような存在ですか。



GPS 搭載で居場所が分かる「おさんぽさん」

幅広いネットワークから 新商品が生まれた

青山氏を中心とする幅広いネット
ワークから新しいサービスが生まれ
た。それはGPS（衛星利用測位シス
テム）を使い、認知症の方の行方を特
定するサービスだ。開発を担当したの
は青山氏の仲間で、IT会社勤務の
伊藤大輔氏だ。伊藤氏は介護保険制
度開始時に介護報酬関係の請求ソフ
トを担当したことがきっかけで、介護

高齢者110番の
家を立ち上げた理由は
左 高齢者110番の家はどのよう
な理由から立ち上げられたのでし
ょうか。

対に他人を束縛しない」ルールが、地
域住民に心地良い空間を届ける要因
でもある。



高齢者110番の家を示すシール

今回の座談会に参加していただいた方々からのメッセージ。

青山氏の情熱に賛同するように、この日も多くの仲間が「きたぽっと」に集まった。高齢者110番の家と密接な関係にある「行方不明から安全に戻る事を願う会」会長の三木泉氏、北海道介護福祉士会会長の小泉昭江氏、看護師を退職したばかりの三浦道子氏、㈲エーデルワイス社員の櫻井正志氏と樋口靖文氏、そして先述の伊藤大輔氏だ。様々な職業の視点から、誰もが地域の安全と発展を考え、誰もが高齢者問題に対して明確な考えを持ち、それぞれに行動している。北見市をより良くしたいとの強い思いを持つ皆さんから、メッセージをいただきました。（順不同・敬称略）

櫻井 医療も介護も、人と人との付き合いは同じです。何がどうなっても変わりません。人と人との付き合いが好きな人がたくさんこの業界に集まってきて、そこから技術を学んでいくところをすごく期待しています。実際、自分もそうなりたいと思っています。

樋口 新たに介護の世界に入る時に、どのように伝えていけばいいか、どこから入ったら良いのかなとずっと思うようになりました。新卒の高校生にどう伝えたらいいか、どの角度で伝えたらいいかを考えています。人を思いやり、話をしっかりと聞くことが大切ですね。

伊藤 IT業界からすると、生活が豊かになるIT化もありますが、未来の日本につなげるためにも高齢者と子供のためになることに投資をしていくべきですね。IT業界だけでものが成り立つわけはありません。僕はあくまで皆さんのことをサポートすることが仕事ですから、ターゲットを見極めたいですね。

三木 自分が死んでいく時には、おそらく若い人たちの力で支えられるでしょう。未来にと言ったらおかしいですけど、何とか頑張って、この仕事に就いて欲しいですね。私は自分の将来のために若い人に優しくしています（笑）。介護職に就く人は家庭の中で子供を育てる時にベストな人になるのかなと思います。

三浦 これからの学生さんに、「何もできなくていいんだよ」と伝えたいですね。何かをしなくてはいけないではなく、「何もできなくてもそばにいてただけであなはすごい、安心を与えられるんですよ」と、そういうことを伝えられてあげられたら、この仕事って素晴らしいと思えますから。

小泉 何らかのきっかけがあって、後押しがあれば、人はすごく変わると思います。変わるきっかけを自分たちがどこまでできるか、一人ひとりじゃできないけれど、助け合いながらできるのかなと思います。介護を目指そうとする人を含めてよりどころになってほしいです。アドバイスをくれる人が周りにたくさんいるんだよと伝えたいです。

青山 介護の素晴らしさは、お医者様やご家族と共に縁のあったその人の側で、人生の最後の章を、いかに満足し旅立たれるのか、その人生に色付けできる尊い仕事です。未来の学生さんには、すぐには介護職に就かなくても、自分が挫折をしたり、少し心に思うことがある時こそ、介護業界にチャレンジする“とき”であり自分の人生の質も高まるチャンスですよ。

探訪を終えて 左理事長の総括

「高齢者110番の家」の取り組みは、子供110番と同じく、高齢者を守る地域の理解が増えるきっかけになります。高齢者や認知症の方の駆け込み寺であり、今後さらに「高齢者110番の家」のシールが地域住民に浸透し、効果を発揮することを期待しています。地域として「認知症で困っているのでは？」との介護のアンテナを張ることに繋がります。青山さんのリーダーシップに周囲が巻き込まれるようにそれぞれの専門性を発揮して、相乗効果を生んでいます。青山さんは考えたらすぐに行動し、頼まれたら断れない、包み込むような性格で、みんなの「母」の要素がありました。北見だけで終わらせてしまうのはもったいない取り組みだと思います。

北海道・北見市 高齢者110番の家 地域食堂「きたぽっと」



有限会社エーデルワイス

☎ 0157-33-5671

所在地／北海道北見市新生町58-17
<http://edelwaice.com>



高齢者110番の家の副会長、地域食堂「きたぽっと」主催
青山 由美子 Aoyama Yumiko
認知症介護指導者、有限会社エーデルワイス代表取締役



青山氏の情熱に賛同した仲間が集まる

業界に携わることになり、今では「行方不明から安全に戻る事を願う会」の事務局長も務めている。
青山氏は介護現場の視察でオランダを訪れた際にITの可能性を目の当たりにした。人材不足を補うように、IT機器でシステム管理しているデイケアやデイサービスが一般的だった。現地の人から「日本は技術が進んでいるのに、なぜしないんだ」と言われた。高齢者110番の家開設時から伊藤氏に相談していた行方不明時のGPSは、安価で、より性能の良い具体的なものを作成することができた。この経験からも今後もオランダのようにどの介護現場でも手が届く価格で作成できないものかと、これからの介護現場についても思索している。

2014年秋、伊藤氏が勤める会社が㈲NTTドコモが開発したGPS端末を使い、居場所を特定できるサービスの提供を始めた。サイズはわずか38.5ミリメートル×45.5ミリメートル×11.85ミリメートルの「おさんぽさん」だ。
小型サイズを活かした防水機能付きで、靴や衣服などに違和感なく身に着けられる。認知症対策にはもってこいのアイテムだ。
現在は北見市内限定でのサービスとなっているが、介護業界のみならず、各方面から注目されている。原価ギリギリで、売れば売れば赤字で、よく伊藤氏は苦笑いする。14年8月、広島で豪雨により土砂災害が発生し74人が亡くなった惨事の際に、「おさんぽさん」の問い合わせが相次ぐなど、災害時にもその効果が期待できる。
青山氏は力説する。「このサービスを自治体が介護保険を適用してくればいいのですが。せっかくここまで優れたサービスを、北見市内だけで眠らせておくのはもったいないです。ぜひ高齢者110番の家と同じく、日本中に紹介して欲しいですね。青山氏は良いものは自分たちだけで終わらせるのではなく、全国に広げたいことを願っている。

地域を守るために草の根運動を続ける

高齢者110番の家の今後の展望として、「今は『高齢者110番の家』の出前を広めたいと検討しています。場所を構える事は、ランニングコストもかかりますが、地域のセンター等を使い、月に1度でも集まることで安否の確認ができます。また、地域の人が自宅以外で気楽に会える場所は、グループホーム等の事業所の中でも良いわけですね。お一人住まいの方等が、朝の10時から11時30分頃までのホームの『心身活性の時間』にお越しになっても良いのではと地域の民生委員さんと進めつつあります。ここには、地域密着型のグループホームの運営推進会議の参加者2人もお手伝いをしていただけるようです。地域の人々にとっては事業所を知ることにもなり、風通しの良い運営ともなります。お金をかけなくても身近にあるものを利用し、なおかつ互いが幸せな気分になることで双方にメリットとなります。福祉を営む人等が地域を思い発信することも今からできることであります。志を同じくする人々は、どうぞお気軽にお知らせください。微力ですが応援させていただきます」と

青山氏は言う。

認知症の方を見かけたら、声を掛け、名前や住所が分からなかったら警察に連絡することが常識となる町。介護保険制度が独り歩きして、何をどこに申請したらいいのかわからない人には、地域包括支援センターを紹介する優しさ。近隣地域で高齢者110番の家のアンケートを集計したところ、「ぜひとも私たちのところでも始めたい」との声が多数寄せられたという。この取り組みを広めたいと思う人は多いだろう。青山氏は「上から言われたことはなかなか広がりません。自分たちの地域を守るために、命を守るためにも、草の根運動のように高齢者110番の家の取り組みは続けていきます」と前を向いた。



左から左理事長、青山氏、三木氏、小泉氏、伊藤氏、三浦氏、近藤理事、樋口氏、櫻井氏